大学生の就職成否とキャリア・レディネスの関係

吉田尚子，原田 章(追手門学院大学)

はじめに

キャリア・レディネスは，安保ら(2008)によると，キャリアに関する諸問題に対する個人の対処準備性であり，生涯発達の視点ではキャリア成熟とも一般的には表現される．大学生にとって，キャリア・レディネスは，職業への移行という観点において必要な要素である．もちろん，大学生の就職の成否に影響を与える要因は，個人特性や環境要因など様々であり，キャリア・レディネスのみで決まるわけではない．しかし，学生のキャリア・レディネスを把握せずにキャリア支援をすると，学生にとって不適切な支援を行う可能性があり，大学の教育において効果的であるとはいえない．

キャリア・レディネスや就職に関する先行研究によると，安保ら(2008)は，キャリア意識や職業志向が学部の特性や学年で差があること，畑野ら(2011)はキャリア意識と学習行動のつながりにおいて自律的な学習動機づけの高さが媒介変数になっていること，中島(2016)は就活ルールが守られている企業に就職した学生ほどミスマッチを起こしていないことを明らかにした．しかし，これらの研究は，キャリア・レディネスと就職成否の直接的な関係について検討していない．吉田ら(2015)は，キャリア形成科目の単位修得状況と就職結果の関係に着目して，キャリアへの早期意識づけが重要であることを指摘した．

そこで，本研究では，キャリアに対する大学生の心理的側面を検討するために，キャリア・レディネスを測定することとした．さらに，キャリア・レディネスが，就職の成否によって異なるかどうかについても検討することとした．

方法

本研究では，2015 年 12 月～2016 年 1 月に中堅私立文系大学(学生数約 6400 名) 537 名(2 年生 142 名，3 年生 112 名，4 年生 257 名)を対象に、キャリア意識に関する質問紙調査を実施した．質問紙は，坂柳(1996)の職業キャリア・レディネス尺度 27 項目，市川(1995)の学習観尺度 24 項目，市川(1995)の学習動機尺度 36 項目で構成した．各質問項目に対して，「まったくあてはまらない＝1」～「よくあてはまる＝5」の 5 件法で回答してもらった．なお，就職結果と関連づけるため，任意で学籍番号を記入してもらった．本研究では，キャリア・レディネスの部分についてのみ報告する．

結果

まず，2～4 年生 537 名を対象に，先行研究の 3 領域 9 下位尺度からなる 27 項目について，因子抽出を最尤法，因子の回転をプロマックス法とする探索的因子分析を行った．その結果，因子の解釈性も考慮し，先行研究とは異なる 3 因子構造を採用した．各因子は，それぞれ「意欲性」「行動性」「先の見通しへの無関心性」と命名した．各因子について 1 因子構造が当てはまるかどうか検証的因子分析を行い，モデルが適合するよう変数選択を行った．各因子の適合モデルに対して，3 因子構造モデルが当てはまるかどうか検討し，さらに変数選択を行い，これを最終モデルとした．最終モデルに含まれる各因子の合成得点として，因子を構成する各項目の回答値の平均を求めた．

次に，4 年生 257 名のうち就職結果と関連づけることのできた 212 名を分析対象に，就職決定群(177 名)と未決定群(35 名)の間で差異を検討した．最終モデルから作成した 3 合成得点(X1:意欲，X2:先の見通しへの無関心,Y:行動)の間に，X1 が Y に影響を与え，X2 は直接，Y に影響を与えないというモデルを想定し，このモデルが就職決定群と未決定群に当てはまるかどうかを多母集団の同時解析を用いて分析した．その結果，3 変数間の関係性は同じであるが，平均は異なるというモデルが当

てはまった．図 1 は，各群の非標準化解を示している．各群の平均値について，有意差があるかどうか検定したところ，X1 と Y は p<.01 で，X2 は p<.05 で有意であった．表 1 は，3 合成変数に関する各群の平均値および標準偏差である．

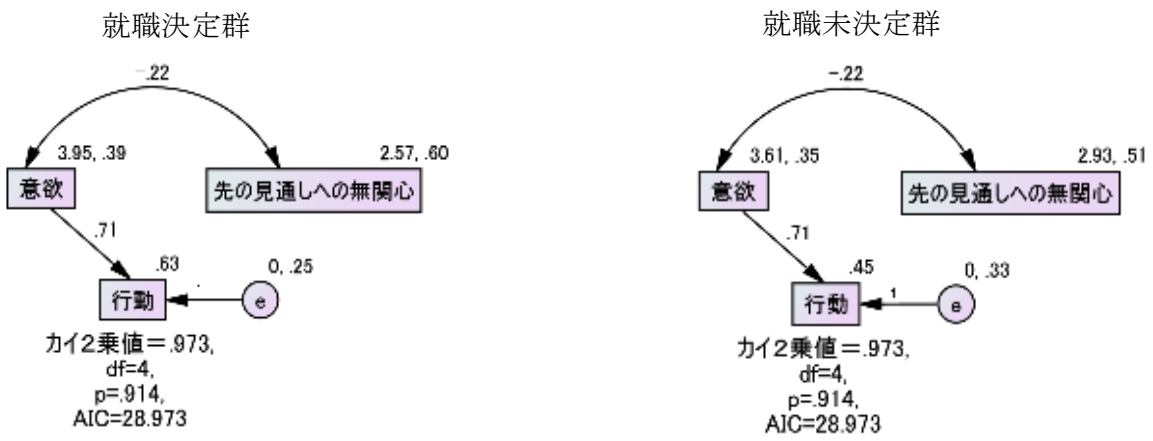


図 1 キャリア・レディネスと就職成否の多母集団の同時解析の結果

表 1　就職結果における合成得点の記述統計量

就職結果		平均値	標準偏差
意欲	就職決定	3.945	0.622
	就職未決定	3.612	0.613
行動	就職決定	3.412	0.666
	就職未決定	2.996	0.721
先の見通しへの無関心	就職決定	2.571	0.776
	就職未決定	2.926	0.737

考察

図 1 より，就職の成否によって，キャリア・レディネスの関係性が異なるのではなく，レディネスの平均が異なっているモデルがあてはまった．このことから，平均の差を調べたところ，表 1 のように就職の成否によって差があることがわかった．したがって，キャリア・レディネスは就職の成否に関係しているといえる．

ただし，本研究で用いたモデルについては，さらに検討が必要であろう．本研究ではキャリア・レディネスの 3 変数のみの関係をモデルに含めたが，因果関係を特定できるモデルとはいえない．したがって，今後の分析においてさらに変数を増やしキャリア・レディネスに関する精緻なモデル構築を検討することが必要である．

参考文献

安保英勇・石津憲一郎・菊池武一剋・千葉政典・猪股歳之(2008).東北大学における学部学生のキャリア意識(2)－キャリア・レディネスと職業志向－.

畑野快・高橋雄介 (2011).大学生のキャリア意識が学習動機づけと学習行動に与える影響.日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集(20),114,2011-09-02.

中島弘至(2016).就職ミスマッチの構造的要因－就活ルールにみる不公平－関西大学高等教育研究,第 7 号,pp.91-103.

吉田尚子，長尾俊明，米澤愼二，原田章(2015).キャリア教育に関する科目の単位を修得すれば就職できるのか.2015 年度大学行政管理学会第 19 回定期総会・研究集会資料集,47-48.